

恩師訪問

Vol.18

小川良子先生

3月3日ひな祭りの日、広報委員の佐野まり子(昭45卒)が3年生の時の学級担任であった小川良子先生を仙台市愛子のご自宅に訪問し、お話を伺ってきました。

秋高に勤務していた頃のことをお聞かせ下さい。

昭和36年から9年間勤務しました。赴任当時は駅前旧校舎。前任校は北高でしたので、男子が机をたいたり、床を踏み鳴らしたりして大きな声で笑うことが新鮮でした。

楽しかったのは秋高祭ですね。各クラスのデコレーションや、あなたたちの時代ではおでんの模擬店。またオペレッタ『真夏の夜の夢』もやりましたね。女子のやり遂げるエネルギーに感服しました。少し上の人たちでは、落語や手品をやったこともあり、みんな精一杯楽しんでいました。英語劇の『修善寺物語』は幸野先生が台本を作られたのですが、国語の小出先生が「英語で『修善寺物語』なんておかしいわ」とおっしゃったことを思い出します。運動会の雲隊のやぐらやマ스ゲームなども創意にあふれたものでした。一方、大学紛争、高校紛争

の時代にもなり、先生たちと教室の皆さんが和やかな関係にあった頃から、信頼関係が失われていく時期でもありました。でも、すべてが温かかった情景として思い出されま

楽しかった秋高祭 英文学書読み、バラに学ぶ



仙台に移ってからはどうされていたのですか。

昭和45年に仙台に移り、県立黒川高校に5年おりました。のんびりとした元氣一杯の農業高校でした。今春からは農業科が廃止され電子工学など

の学科に再編されるとのこと、時代の容赦ない推移を感じます。その後は定年まで市立仙台高校に勤務しました。ちょうど男子校から共学校になったところで、私たち自身が触発されることの多い教育目標が掲げられました。

一方、社会構造の変化によるひずみもろにかぶり、その対応と理想を追うことで試された年月でもありました。そこではうれしいことに秋高時代の氏家先生、岡先生とまたご一緒できました。

外から見て秋高生の良さは何だと思えますか。

すぐれた人への敬意を素直に表せること。そのような仲間の一目置くということ。野球などの応援が自発的にできるといふことも、すぐれた者へのごく自然な敬意の表れなのでしょう。理解力・人としての力があるのだと思います。秋田高校というのは、その伝統が地域で認められてきた恵まれた学校であると感じておりました。

退職してからのことをお聞かせ下さい。

今一番うれしいことは英語の本を読めること。4人のサークルで文学作品を読んでいきます。最近ではモーム、ジェームズ・ジョイス、ガルシア・マルケスなど。その次は茶道。そして夫が関係しているバラ。育てることやバラの文化的な背景について私も学んできました。平成18年の大阪での世界バラ会議では、日本人のきめ細かな企画や運営が、参加した人たちに喜ばれました。一昨年はブリュッセル

近郊のコロマ公園にある国際バラ園に送った日本のバラの苗の育ち様を見に、私も一緒しました。仕事や身辺のことが一段落したときは、これまでの人生を土台としてもう一度生きていることができず。そのためには体をこわさないこと。これまでやれずにきたことに取り組む。私たちはうれしいことがあると、人にも自分自身にも優しくなるものだと思えます。私はクリスチャンではありませんが、今一番納得できる言葉が次の一節です。

旧約聖書『伝道の書』3章 1～8 「天の下、万象に季節あり」 To everything there is a season, A time for every purpose under heaven: A time to be born, and a time to die; A time to plant, and a time to pluck what is planted; A time to kill, and a time to heal; A time to break down, and a time to build up; A time to weep, and a time to laugh; A time to mourn, and a time to dance; A time to cast away stones, and a time to gather stones; A time to embrace, and a time to refrain from embracing; A time to gain, and a time to lose; A time to keep, and a time to throw away; A time to tear, and a time to sew; A time to keep silence, and a time to speak; A time to love, and a time to hate; A time for war, and a time for peace. (The New King James Version)

取材後記

床の間に飾られた内裏びなの掛け軸と生け花を眺めながら、おいしいお茶とお菓子を頂いてからのインタビューとなりました。40余年の空白がいつの間にか埋め尽くされ、

あつという間の時間でした。インタビューは「昨年の大震災でつらい思いをされた方たちが、一日でも早く憂いの重なる日々を克服できますように」という先生のお言葉で締めくくられました。